

令和元年度 徳島県立博物館・徳島県立鳥居龍蔵記念博物館協議会

【日時】

令和元年9月26日（木）午後2時から午後4時15分まで

【場所】

徳島県立博物館 講座室

【出席委員】（50音順、敬称略）

安倍 久恵（フリーアナウンサー）〈副会長〉

大栗 美菜（徳島市立考古資料館学芸員）

角元 良（八万小学校PTA会長）

川真田早苗（元文部科学省学習指導要領改善検討指導・助言委員（牛島小学校教諭））

河野まゆ子（JTB総合研究所地域戦略部長・主席研究員）

塩瀬 隆之（京都大学総合博物館准教授）

原 多賀子（京都外国語大学非常勤講師）

町田 哲（鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授）〈会長〉

松村 幸恵（阿波市国際交流協会会長）

三浦 麻衣（徳島新聞社生活文化部記者）

- 1 開会
- 2 館長挨拶
- 3 委員紹介
- 4 会長・副会長の選出
- 5 議事

- (1) 平成30年度事業実施状況について
- (2) 令和元年度予算及び事業概要について
- (3) 今後の博物館運営について

(1) 平成30年度事業実施状況について 質疑応答

委員	特別陳列「県指定文化財青蓮院十一面観音菩薩立像」は、短期間のわりに観覧者数が多かった。今後も文化財を積極的に展示してほしい。東京国立博物館では阿修羅像を360°から観覧できるようにしていたが、美しい文化財を見せる工夫があれば、1点でも見ごたえがある。
事務局	ちょうど修復が終わったタイミングだったので展示した。いろいろな

	方向から見られるようにしてほしいという点については、工夫していきたい。
委員	企画展「ミネラルズ」を見た。石の種類によって見え方が違うので、照明のあて方に工夫が必要だと思った。この点は少し残念に思う。また、資料の意義を知りたいとき、どこに持って行ったらいいかわからない人が多い。情報の共有をお願いしたい。
事務局	企画展「ミネラルズ」の照明については、確かにご指摘のような問題があると認識している。設備面で限界があるが、工夫はしていきたい。
委員	スイッチを押して照明を当てる体験型の展示はよかった。小さなことでも、できることを重ねてほしい。
事務局	資料の件について、相談があれば応じる旨、ホームページに出しているが、浸透していないので、広報を工夫していきたい。今後も相談には積極的に対応していきたい。
委員	ユニバーサル化について、「触察付き博物館裏側見学」はどのように行っているのか。
事務局	人形浄瑠璃の頭 <small>かしら</small> に触れてもらっている。視覚障がい者には、ヘルパーさんについてもらった。参加した方は中途失明の方で、あらかじめ知識があり、触れることである程度わかってもらえた。生まれつき見えない方については、交流しながらやり方を考えていきたい。
委員	今までは、やむを得ず障がい者への対応をするという博物館が多かった。しかし、今では「文化に触れることは人権」とも言われており、いろいろな人が文化に触れることは権利であると、世界の博物館で認識されつつある。より積極的に環境を整える必要がある。
委員	「教員のための博物館の日」に関連してお聞きしたい。この博物館として、利用に適切な学年は何年生くらいか。
事務局	この学年、というような限定的なものではなく、満遍なく利用できる内容がある。例を挙げてみる。就学前や小学1・2年生では、物事への理解への導入として博物館が活用されている。3・4年生では、昆虫や恐竜、植物など自然系の内容が使いやすい。また、4年生では郷土の伝統産業として藍が取り上げられており、博物館とリンクする。歴史全般になると、6年生がよいが、修学旅行などがあって、学校とし

ての来館ができない場合が多い。また、鳥居龍蔵記念博物館だと、小学校の道徳の副読本で鳥居龍蔵が取り上げられているので対応する。4・5年生の社会科で地図について学ぶので、鳥居記念館の床にある地図が活用できる。

委員 中学生になると博物館には来てくれないが、他館の取り組みの中で、洛中洛外図のゲームを作るワークショップを小中高の先生および中学生と行ったという例がある。中学生くらいでないと、歴史・民俗の展示はうまくいかない。ただ見るだけではなく、一緒に展示を作るというのも、中学生の博物館利用を促す方法の一つだと思う。

委員 そういう専門的な知識を伝えていただくとともに、様々な地域のニーズに応じて、地域の文化を子どもたちに伝えていただきたい。

(2) 令和元年度予算及び事業概要について

(3) 今後の博物館運営について

質疑応答

委員 中期活動目標案の説明で、「県民とともに」を深めるということだったが、どういうことか説明してほしい。

事務局 協働と主体性をもって相互に成長する県民と博物館、という意味で、長期的な課題として、しっかり取り組みを継続し、県民と博物館の関係を深めていきたいと考えている。

委員 博物館を自己実現の場として、県民が利用する方向性を目指す、ということかと思う。他館でも県民と協働して展示する例があり、今の時代にマッチしている方向だ。

委員 新常設展の「顔」は何か。

事務局 コンセプトにふさわしく、徳島を「まるづかみ」できるよう、徳島ゆかりの遊山箱をイメージした棚を用いて、博物館資料を入口で紹介する。天井から吊り下げるバナーも効果的に活用する。

委員 新常設展のミュージアムストリートの機能はどのようなものか。

事務局 現在の展示室は一方通行で、古いところから時代順にたどっていくというものだが、これを解消したいと思い導入した。ミュージアムストリートは自由動線であり、観覧者が主体的に、見たいコーナー、資料

を選択しながら動けるようにするものだ。また、ストリートに面して興味を惹く資料を展示する予定である。

委員 新常設展の説明で、参加体験型展示として、VRやARなどがあったが、こうしたものは高額であり、しかも数年たてば陳腐化する。予算バランスが必要ではないか。

事務局 従来なかったものとしてデジタル系の参加体験を強調しているが、実際にはデジタルとアナログの両方を用いた参加体験の導入をすることにしている。確かにデジタル系のものは導入、維持ともに経費が必要となる。将来的な維持コストについても検討しながら進めている。

委員 県立博物館と鳥居記念館が別々に活動しているのがもったいないと思う。せっかく一緒にあるのだから、そのメリットを活かしてほしい。

事務局 博物館の今の展示の中にも、鳥居龍蔵が調査した城山貝塚の紹介など、関連性がある。鳥居は「発見を重ねた人」で、そこから大胆な推論や仮説が生まれている。そうした側面を紹介したり、展示の中で発見を楽しんだりすることは、新しい常設展の運用の中でできることと思う。無限定に偉人として賞賛するだけとは違い、今を生きる指針にもなる。

委員 鳥居の、常人では発想しそうな個性的な部分にフォーカスするのもよい。今の人は正解を見つけようとする。「発見」を直接に働きかける。「ここは発見する場所です」というメッセージを投げかけ、「知のエンターテインメント」施設にしてほしい。

事務局 博物館は、徳島の自然と歴史を扱うのに対して、鳥居記念館は、鳥居龍蔵という人物に関する資料を扱うという対象の違いがあることに留意する必要もある。

委員 企画展「とくしまの恐竜時代」を見て、大昔から徳島にもこんな生物がいたのだということがわかった。もっといろいろな人に見てもらいたい。徳島出身者も、徳島にはこんなものがあるんだというのを誇らしく思えるような活動をしてほしい。

事務局 企画展では、恐竜について広く知っていただくことができた。徳島の恐竜をきっかけとして、活躍する人材を育てたい。

委員 恐竜について、すでに先進的な取り組みをしている福井県に対して、

	徳島県ではどのような事業を展開していくのかということが課題だろう。
事務局	徳島の子どもが絵を描いて、群馬県の「上毛カルタ」のように地域性が高く、愛される恐竜カルタを作ってみるとか…。打ち出し方を考えていきたい。
委員	クラウドファンディングについて、「自治体への寄付です」というふうに示すと、もっと寄付が集まったかもしれない。住民税などが控除される点などをより強く示したらよかったのではないか。
委員	恐竜も魅力的だが、3月の「鳥居龍蔵ゆかりの地を歩こう」に参加したところ、とても勉強になってよかった。今後も地元の魅力をもっと知りたいと思うので、頑張っていたきたい。
委員	展示とボランティアの関係について教えてほしい。新常設展では、展示解説ボランティアを導入する予定はあるのか。
事務局	現在、公募により集まってもらったボランティアと一緒に、イベントの企画と実施を行っている。今後、解説ボランティアを取り入れるかどうかは未定である。
委員	博物館に行くたびに新しい発見がある。しかし「博物館ってどこにあるの？」とも聞かれる。リニューアル後も、一度行って飽きるような展示ではなく、次につないでいくような展示を目指してほしい。
事務局	博物館の敷居が高いといわれることがある。その敷居をいかに下げることが課題だ。タウン誌等にもイベント情報を載せてもらっているが、アンテナにひっかからない人も多く、広報は意外と難しい。博物館が小難しいところではなく楽しいところと思ってもらえることや、将来のユーザーを育てていくことも課題と考えている。今回のリニューアルでは、「よみときライン」や映像などを設けて、展示替えがしやすい構造にしているので、これを十分に活かしていきたい。
委員	参加体験型の展示は、具体的な資料に結びつけることが重要であると考える。企画展「とくしまの恐竜時代」では、調査の様子を示しているのが印象的だった。自分たちで調べてみたいと思える工夫があってもよい。いろいろな人がかかわっているのを可視化する。コアな博物館ユーザーを育て、そこから博物館を支えていく人を育てることが大

事である。

事務局

様々のご意見をいただいたことに、感謝申し上げたい。常設展の全面リニューアルは、大きな予算をかける事業となるので、多くの県民に来館していただけるものと信じている。そして、リピーターをさらに増やしていけるよう、整備を進めていきたい。

以上